

最新事情

資格取得への意欲を高く評価。
自ら学び、視野を広げる力を持つ学生を育てる

阪南大学

(大阪府松原市)

昭和40年の開学以来、阪南大学では実学教育に力を注ぎ、さまざまな分野で即戦力として活躍できる人材の育成を行ってきた。学生が身に付ける知識は、いずれビジネスの現場で発揮されるべきものとして強く意識されており、産学連携によるPBL (Project Based Learning) 問題解決型学習)にも積極的に取り組んでいる。同学でのキャリア教育と就職支援について伺った。



静かな住宅地にある阪南大学キャンパス

資格取得を通して培う努力と 学びの力を評価する

阪南大学では開学以来、ビジネスの現場で発揮できる実践力を身に付ける「実学教育」を目指すべき柱としてきた。

1年生が全員履修する「スタディスキルズ」で言葉の選び方や要約の仕方、レポートの書き方といった大学での学び方の基礎を身に付け、4年間を通して専門的な知識を積み上げていく。その知識を実際の活動で発揮するために、1年次からキャリア教育で将来への意識を形づくり、学外連携のPBLを行うキャリアゼミやインターンシップで知識と行動の実践を行う。同学では、さまざまな角度から、学びを現実生かすことに力を入れてきたのである。

キャリア支援の中では、資格取得も大きな柱として推奨してきた。入学段階で大学指定の資格を取得済みの学生には1件につき10万円の資格奨学金を出しているという。

「資格取得のために学んできた経験は、それだけのやる気を持っていることを示すもの。学びに意欲的な学生を受け入れたいと私たちは考えています」と、副学長でキャリアセンター長でもある国際コミュニケーション学部の神尾登喜子教授は説明する。在学中に取得した資格についても、一部には学長奨励賞を与えている。

「資格取得のための学びは、やればできるという達成感につながります。一つクリアできたら次のグレードへと向かう意欲も湧きます。大学での専門的な学びの多くは机上の学問ですが、資格取得では、そこでは味わえない学びの可能性を実感できると考えています」。

秘書検定もその一つだ。神尾副学長は秘書検定の問題を見て、社会人の基礎力を伸ばすために非常に役立つ内容だと感じたと話す。

「ゼミの男子学生が『秘書検定を受けようと思う』と言うので、ぜひ受けたいいいよと勧めました。女性に限らず、秘書検定3級・2級を学ぶことで、部下力を上げられるからです。職業人には、まずは現場、次にマネジメント、そして経営という三つの段階があります。この最初の段階で、仕事を遂行する部下として求められる、見通しを立てて行動する力、コミュニケーション力、判断力、情報収集力、それらに



「学んだことを生かして、どんなことでもできるはず。学生諸君の成長が何よりの楽しみです」と語る、副学長でキャリアセンター長でもある神尾登喜子教授(国際コミュニケーション学部)

秘書検定で、筋道を立てて理解し説明する力が付く

加えて社会人基礎力は、秘書検定で身に付けることができる最たるものだと思います」。

経営情報学部4年生の稗田千遥^{ひえだちほる}さんは、3年生の夏に秘書検定2級、秋に準1級に合格した。「もうすぐ就職活動をして社会人になると考えたときに、何かを継続して成し遂げたいいうことを形にしたいと思いました」と話す。具体的な目的はなかったが、それならと、資格講座カウンターで秘書検定を勧められた。

「初めは問題を解いても2割くらいしか分からず、新たに知ることばかり。例えば席次。応接室の中だけでなく自動車や電車でも席次があると知りませんでした。難しい内容もありましたが、大人の社会ではこんなことを考えて行動するのだから、だんだん面白くなりました」。

2級に合格した後、さらに上を目指せるので

はと思い準1級に挑戦することに。やはり難しかったのは面接だ。

「最初は、ロールプレイングに恥ずかしい気持ちもありました。特に標準語の敬語。普段は関西弁なので、標準語に変換して、それを敬語にするというのもハードルが高かったのです。でも講座の先生が、皆の前で一人ずつロールプレイングをする機会をつくって『今は間違えても大丈夫。場数を踏むことが大切』とアドバイスしてくださったので、安心して練習できました。実は、準1級を目指そうと思ったのも講座の先生のおかげ。どんなときも笑顔で私たちの考えや行動を引き出してくれるので、次も頑張つてチャレンジしてみようという気持ちになりました。合格できたことで、社会人になるための準備が一つできたと思います」(稗田さん)。

稗田さんの体験談を聞いて、神尾副学長が「秘書検定に合格した学生は、何についても『なぜそうなるのか』を筋道立てて理解し、説明する力を身に付けているように感じる」と自身のゼミ生を振り返る。「あなたはどうか?」と問われた稗田さんは、大きくうなずいた。「そう思います。秘書検定の勉強を通して、自分がどこで間違えたのか、言葉の一つ一つ追って『ここがこうだからこうなる』と考えることが習慣になりました」(稗田さん)。

他の科目でも、検定の学びで培った考察力は生かされていると言う。神尾副学長の「単に資格試験に合格するだけでなく、そこで得た学



「資格取得については資格講座窓口のスタッフや各講座の講師と密に話し合い、本学の学生に合った教え方を願っています」と話す、キャリア支援課の大塚楠斗氏

びを活用できる自分を目指してほしい」との願いは、しっかりと届いているようだ。

資格講座の運営にも携わるキャリア支援課の大塚楠斗^{なほと}氏は「秘書検定は、具体的な目標はまだないけれど何かにチャレンジしたいという学生に最適」と話す。

同学の資格取得支援は、キャリア支援課と資格講座カウンターのスタッフ、各資格講座の講師が緊密にコミュニケーションを取りながら行っている。

「資格講座カウンターのスタッフは外部委託ですが、学内に常駐して日ごろから学生と密に関わっています。本学の雰囲気や学生の様子をよく理解してくれているため、学生にとっては頼りになる存在。ま

キャリアセンターでの面談の様子。3月だけでも1500件の予約が入る。「一人あたり、時間は45分間。話を聞き出し、一緒に強みを探していきます」と大塚氏





経営情報学部4年生の穂田千遥さん。秘書検定2級、準1級に合格。「知らないことばかりで、勉強しながらワクワクしました」と楽しみながら学んだ様子を聞かせてくれた。次は1級合格が目標だ

細やかなサポートで 学生個々の経験を引き出す

た、各講座の講師にも、本学の学生に合った指導をしてもらえるようにお願いしています」。

「キャリアゼミ」は、同学のさまざまなゼミが正課科目とは別に行う学外連携のPBLである。学部で学んだ専門的な知識を生かし、近隣の企業や自治体が抱える課題解決に取り組んでいる。内容や進め方は、ゼミや課題によってさまざまだ。

穂田さんも2年次、3年次に参加し、道の駅や駅前施設の集客力アップのための調査を行った。その中でさまざまな年代の人と関わることになり、コミュニケーション力やマナーの大切さを意識する場面もあったそうだ。

「街頭で数日間、一般の方々100人ほどに声をかけてアンケートを取ったのですが、阪南大学の腕章を付けているので大学を代表しているという自覚もあり、緊張しました。普段、周囲からどう見られているかを意識することはあまり

ありませんが、だからだらし話し方のくせを直そうとか、話し方が下手でも笑顔で声をかけようとか、相手との距離感に気を付けようという意識がだんだん芽生えてきました。秘書検定を学んだことにより、立ち居振る舞いや話し方などを現場で生かせたと思います」（穂田さん）。

このように、資格取得やキャリアゼミなど、同学では積極的に活動できる機会が多々あり、多くの学生が実際にそれらに参加している。それでも、中には「何もアピールすることがない」と悩みを抱えてキャリアセンターにやってくる学生がいると大塚氏。行ってきた活動を、どう就職に向けてのアピールに落とし込んだらよいのか分からないと悩む学生は多いのだ。

「本人は『大したことがない』と思っても、客観的に見ればしっかりとスキルになっていることもあります。ある学生は、アルバイト経験も資格もないと言っていましたが、よく聞いてみるとパソコンで音楽を作るのが趣味だと言う。なかなかのスキルです。内容そのものが仕事に役立つことでなくても、趣味でも独学で力を高められるのなら、仕事でも新しいことを学ぶ力として生かせるはず。キャリアセンターでは、一対一の面談で学生に寄り添い、やってきたことや培ってきた力を一緒に振り返り、考え方の角度を変えられるようにアドバイスしています」（大塚氏）。

穂田さんも既に何回も面談を受けており、一緒に強みを考えてくれるキャリアセンターの

スタッフに心強さを感じたと話す。友人にも「絶対、面談に行った方がいい」と勧めているそうだ。

最後に、神尾副学長は同学のキャリア教育の目標をこう語ってくれた。

「種は、植えないと芽が出ません。種とは自身の長所が詰まったもの。土にまいて水をあげたら花が咲くどころか立派な実がなるかもしれない。たった一粒の麦の種であっても、さまざまな学びを積み重ねていけば、学生には青々と広がる麦畑が見えるはずです。これだけいろいろなことをやってきたのだから、できないことはないのではないかと思えるような4年間を提供できる、阪南大学のキャリア教育でありたい。これがキャリアセンター長としての私の夢であり、目指すところです」。



学生たちは、目標に向かって自主的に学習する習慣を身に付けていく

